

壮年会の機能と地域形成の役割

末 崎 ふじみ

(九州大学大学院)

はじめに

本論は、九州地区における壮年会のうち、活発な活動を展開している三つの壮年会の活動をもとに、壮年会が地域社会形成に果たす役割を明らかにしようとするものである。そのために、壮年会は集団としてどのような機能を有し得るのか、またそれらの機能はまちづくりとどうかかわっていくのかについて分析する。さらに、まちづくりを推進するためには、特に現代のように変化の激しい社会においては、生活の中で当面する各種の課題を解決することが不可欠になるが、既存の知識・技術だけでは到底対処しきれない。従って、どうしても学習活動が介在せざるを得なくなる。生涯教育・生涯学習は、このように日々の生活に直結した学習必要を持つ人々にとってこそ最も重視されなければならない。壮年会が地域社会形成にかかわろうとする時も同じであろう。また、まちづくりを推進し得る集団は壮年会のみに限定される必要はない。現在も地域の中で活発に活動している団体は多々存在する。どんな集団がそれをなし得るのか、あるいはそれはいつ起こるのか。集団と地域活動の関係についても考えてみたい。

1. 壮年会活動の実態

まず壮年会活動の実態をみてみよう。地域集団の活動は、一般に低調であり、壮年会も例外ではない。むしろ他の地域集団に比べても活動は低調である。その中で、特に活発な活動を続けている壮年会がある。それは、宮崎県 ^{みやこのじょう} 都 城市 ⁽¹⁾、長崎県 ⁽²⁾ 森山町、福岡県 ^{かすや} 粕屋町 ⁽³⁾ の壮年会である。九州地区におけるこの三つの壮年会は、まちづくりにかかわる重要な集団として機能しているといってよい。即ち、

188 自由投稿

会の存在が地域住民に認められ、地域の中で一定の役割を果たしているのである。これら三者の活動を、成立経過をふまえて一覧化してみるとおよそ次の表のようになるであろう（表中の「発達段階」及び「対応する機能」については第3節参照）。

表1 宮崎県都城市の壮年会

年 代	発 達 段 階	主 な で き ご と	主たる目的・動機	対応する機能	備 考
昭和20年代	親睦団体	初期壮年会結成 ひげ面会 やろう会 おやじ会 朝寝ごろ会 など	自衛消防 頼母子講 酒のみ会 青年団より PTAより 選挙の話し合いグループより	相互扶助機能 “ 親睦・交流促進機能 帰属感の保障機能 “ 地域問題の解決機能	・各壮年会の結成経過は様々である
昭和40年代					
昭和49年	親睦・学習団体	壮年団体連絡協議会結成 ソフトボール大会開始 鯨江市壮年会との交流開始 交通安全用立て看板の設置運動	情報交換 単位間の交流 情報交換	親睦・交流促進機能 学習機能 地域問題の解決機能	(26グループ) ・18グループで結成 (連協規約作成) ・連絡協議会結成以後、単位グループの結成が進み、グループ数が激増する
昭和50年	親睦・学習・地域活動団体	リーダー研修会 六月灯、おねっこなどの伝統 芸能の復活	リーダー養成 地域伝統継承	学習機能 地域問題の解決機能	100以上のグループ 115グループ
昭和59年		連絡協議会結成10年			

表2 長崎県森山町の壮年会

年 代	発 達 段 階	主 な で き ご と	主たる目的・動機	対応する機能	備 考
昭和32年	親睦団体	(鎌早大水害)			水害により40数名死亡
昭和33年		釜壮友会の結成 日の出会の結成 その他のグループ結成	青壮年の一致団結 集まることに意義あり	親睦・交流促進機能 相互扶助機能 帰属感の保障機能	
昭和37, 8年	親睦・学習団体	奉仕作業の開始 研修会の開始	環境美化 農業の振興等	相互扶助機能 学習機能	12グループで結成 昭和54～56年 派遣社会教育主事による働きかけ 20グループ 10グループ
昭和46, 7年	親睦・学習・地域活動団体	地域の習慣の改善(壮友会)		地域問題の解決機能	
昭和48年		壮年会連絡会議 (5グループ)	情報交換		
昭和51年		壮年グループ連絡協議会結成 壮年グループ運動会開始	情報交換 会員及び家族の交流	親睦・交流促進機能	
昭和60年					

表3 福岡県粕屋町大隈積徳会

年 代	発 達 段 階	主 な で き ご と	主たる目的・動機	対応する機能	備 考
明治33年	親睦団体	大隈積徳会の結成 区民による認知	村内の厳和	親睦・交流促進機能	・33名で結成 ・会則の作成 ・夏越祭の実施 （会の主な行事はほとんど変わらず） ↓ 戦争の影響を受けて名称を変更 ↓ 47名
明治39年	親睦・学習・地域活動団体	農業関係学習会開始	農業の振興	学習機能	
		信用組合設立 夏越祭 丸山道清掃	伝統の継承 環境美化、伝統継承	相互扶助機能 地域問題の解決機能	
昭和17年		名称変更（壮年団）			
昭和22年		積徳会に改称			
昭和30年		社会教育振興会長より表彰			
昭和60年					

2. 地域社会の変化と成人男子の社会組織の変化

(1) 都市化の進行と地域集団の衰退

成人男子の地域における組織化は、地域社会の変化に応じて変わってきている。地域社会の変化をひとことで言えば、農村社会から都市型社会への移行とすることができる。農村社会では、村落共同体の中で人々が協力しなければ農作業が成立せず、従って生活が維持できない。特に成人男子は主要な労働力であり、また自治組織の運営者でもあった。このような、いわば自給自足型の社会の中では、地縁を基盤とする青年団、壮年会といった集団は不可欠のものであり、生活全般にかかわる物事を処理するうえで重要な役割を果たしていたのである。

しかしながら、昭和30年代に始まった高度経済成長の波を受けて様相は漸次変化していく。都市化の進行、第2次・第3次産業従事者の増加、農家の兼業化、都市部への人口集中等生活の変化は著しい。それとともに農業は衰退し、農村社会に不可欠であった共同作業は必ずしも必要ではなくなった。人々の移動も激しく、行動範囲が拡大するにつれて、生活は地域内だけに限定されなくなり、その分、地域内の結合も薄れていった。同時に、青年団、壮年会に代表される地縁集団の衰退も始まった。即ち、地縁集団に頼らなくても生活が維持できるようになったのである。これらの現象は、“地域社会の解体”というような言葉で言い表わ

されている。この中で成人男子の組織化に関してもいくつかの新しい現象が現われてきたが、次の2点は注目に値するであろう。

それは、未組織住民の発生と機能集団の成長である。

ア. 未組織住民の発生

村落共同体社会に、都市化、核家族化、高学歴化、情報化といった様々な変化が急激に押し寄せ、人々に変化への対応を迫った。人々は、そのために各種の新しい活動を始めざるを得なくなった。あわせて職場が居住地区から離れ、地域内の人的つながりは次第に他の人間関係にとって代わられるようになったのである。さらに、生活の多様化は人々に個人的生活重視の方向を選ばせるようになり、このことは青年団、壮年会といった地域集団への加入率の低下という形で現われた。即ち、地域集団に属さない、あるいは属していてもほとんど活動しないという未組織住民が大量に発生したのである。

イ. 機能集団の成長

一方、都市的生活の浸透、第2次・第3次産業の増加に伴い、集団への所属の仕方にも変化が現われた。たとえば、1人の成人男子を想定した場合、彼は昼間は会社にて、利益を追求する集団の一員として働き、夕方は英会話学校へ通い、勉強する集団の一員となり、日曜日には釣りのサークルで海へ出かけ、余暇を楽しむ集団の一員として過ごす。もちろん彼は家族の一員であり、時にはPTAの会員として学校へ出ていくこともある。このように分散した所属の仕方をするようになったのである。しかも、仕事や余暇、学習といったようにある特定の機能を満足させるために属している。これは労働と生活との分離に端を発しているといえよう。未組織住民の発生と同時に、他方では生活の多様化に伴い、このような機能集団への所属が増えてきたのである。各種サークルの誕生、それに付随する雑誌、たとえば園芸、オーディオ、釣り、車、各種スポーツ、語学といった専門誌の発行種類の爆発的な増加をみてもそれは明らかである。

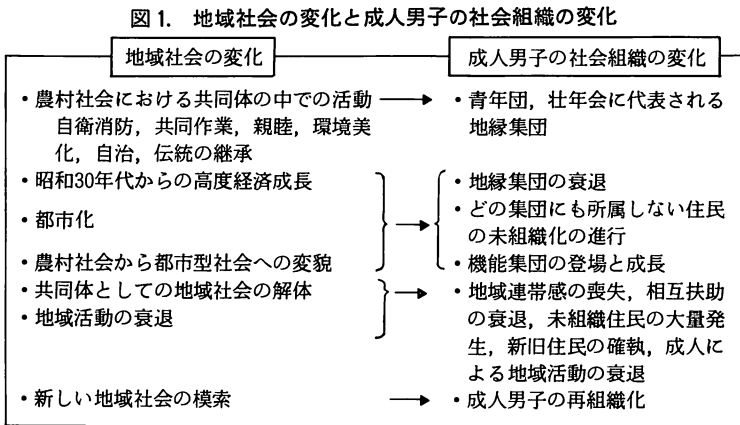
(2) 成人男子の再組織化

しかしながら、都市化の進行等によってもたらされる否定的な影響も大きい。地域社会の解体によって、村落共同体の中で維持されていた機能は当然果たされなくなる。それは、地域活動の低下、地域連帯感の喪失、相互扶助の衰退等と関連する問題の登場という形で現われた。新興住宅地が増えたところでは、新旧住民の対立という問題も発生している。このような状況を前にして、近年、新たに地域社会が見直されてきている。そこで言われる地域社会には、“コミュニティ”という言葉に代表されるように、「共同体解体のあとの民主的主体的な住民による

地域社会の再建⁽⁴⁾」という新しい意味が込められているのである。

コミュニティ形成のためには地域住民が協力して当該地域の問題を解決していくことが不可欠である。そのためには、1度崩壊した、あるいは下火になった地域集団を再び組織化することが必要になる。“ふるさと運動”や郷土のまつりの保護あるいは創造といった形で各地で話題になっている運動も、地域集団の再組織化のひとつの過程であるといえよう。先に見た壮年会の中でも、都城市のように、“このままではわれわれの地域はうまくいかない”という漠然とした危機意識が集団結成の源となったことを考えても、地域社会形成を進めていくうえで行動力に富む成人男子の集団は必ず必要であり、それは以前の共同作業のための集団ではなく、山積する課題を解決していくための集団として登場すべきであろう⁽⁵⁾。

以上をまとめると、地域社会の変化と成人男子の社会組織の変化は次の図1のように表わすことができる。



3. 壮年会の有する機能の分析

では、地域社会の変化の中で、現存する壮年会は個人にとってどんな意味をもっているのだろうか。またそれは、地域社会の形成にいかに関与し得るのか。それらを壮年会という集団の有する機能を分析することによって探っていきたい。

(1) 壮年会の有する八つの機能

都城市、森山町、粕屋町の壮年会の活動をもとに、壮年会が果たし得る機能を取り出すと、以下の八つにまとめることができる。

192 自由投稿

ア. 個人的活動の共有化機能

個人的活動とは、園芸、謡曲などの趣味、語学などの教養、各種資格取得など実益と結びつく学習・文化活動を指す。本来は個人の選択により個別に始められるものであるが、仲間をつくり、共同で活動することによって活動内容が深化・拡大する。粕屋町積徳会における謡曲、森山町における踊り、都城市における園芸、囲碁、将棋といった活動がそれである。

イ. 帰属感の保障機能

ある集団に所属するということ、しかもそれが信頼感のある基礎的集団である時、その集団に所属することによって人は大きな心理的安定を得ることができる。心理的一体感が保たれている仲間集団の存在は、“いざというときはここに頼れる”という心の支えとなるからである。もちろん家族という第1次集団には誰も属しているわけであるが、家族の中だけでは得られない同志的信頼感を得ることができる。つまり、それぞれ一家の柱として生きている人々の集まりであり、人生の先輩も数多くいる。悩みや相談事を打ちあけることのできる集団でもある。1人の人間として確立した生活を営みながらも、このような同志的仲間の存在が精神的支持母体としては非常に重要なのである。

ウ. 親睦・交流促進機能

壮年会結成のきっかけを調べてみると、「とにかく集まって、酒でも飲みながら話をしよう」という形で始まったところがほとんどである。それをその場限りの集まりに終わらせず、会として組織することによって定期的な活動が誕生している。このことは、相互交流、相互理解の促進につながる。森山町でも壮年会の結成後、会員旅行が始まり、花見が催され、家族旅行にまで進んでいる。若い20代から50代に至るまで各年齢層の仲間ができ、人間関係のネットワークも拡大する。またそれは会員のみにとどまらず、家族にも波及する。そして活動が地域活動を含んでいく時、参加者は地域全体へと広がるであろう。親睦・交流の促進は、地域の活性化を生みだす源ともなるのである。

エ. 相互扶助機能

森山町の“壮友会”では、災害で壊れたある会員の家の屋根の修理を会員総出で行ったということである。都城市では、かなりの単位壮年会で街灯点検や夜回りを行っている。このように会の組織化によって会員相互の協力・サービスの交換が可能になる。成人男子はそれぞれの職業ではプロであり、また個人的にも様々な知識・技術を有している。その知識・技術を交換しあい、教えあうという活用の仕方も可能である。

また、日常生活上の問題の相談・助言機能も果たし得る。わが国では、専門の

相談機関はまだまだ発達しておらず、かつ日本人の特徴としてそのような第三者よりも、身内や身近な知人・友人に相談する傾向が圧倒的に強い。この時、経験豊かな壮年会の仲間は相談相手として申し分ない資格を備えているといえるのである。

オ. 学習機能

壮年会の仲間との情報交換や活動プログラムを通して各種の事柄を学ぶことができる。都城市、森山町、粕屋町とも壮年会において、会員の共通の関心事項をテーマにした学習会（たとえば税金、稲作、親子関係など）が開かれている。社会的条件の変化が質・量・速さともにその度合いを深めて行けば、それに伴う適応や学習の必要はますます高まっていくと予想される。特に成人の学習は実生活上の必要に起因するものがほとんどであり、それだけ緊急性が強い。また、個人の努力だけでは到底追いつかない部分も多い。その点、壮年会等の集団には、意図的・無意図的な学習機会がふんだんに含まれており、それをうまく利用することによって生活の変化に適切に対処することができるのである。

カ. 個別の問題解決機能

たとえ会員全員には関係のない問題であったとしても、それを集団として取りあげることによって当事者のみで解決策を探るよりも遙かに容易に解決できる。たとえば、都城市の壮年会では、見通しの悪い所のヤブ払いや山間のカーブミラーの清掃など、会員からだされた問題を取り上げて会として取り組み、定期的な行事としている。

キ. 地域問題の解決機能

壮年男子という性格上、地域の課題は当然会員の主要な関心事となろう。地域課題について話し合い、解決のために実践に移行する力が十分に備わっているところが壮年会の強みでもある。地域の一員としての責任感、使命感を実践に移し、社会参加を果たす恰好な機会でもある。森山町の“壮友会”では、行政上の組の区分を全面的に改正することに力を注いだ時期がある。年長者の反対は強かったが、熱心に説得して取えて改正に踏み切った。その結果、現在は皆に喜ばれているということである。また、青少年問題に関して粕屋町の積徳会では、毎年、「夏越祭」という祭が開かれる時、子どもの相撲大会が催され、それに備えて会員が交替で子どもたちの指導にあたっている。その接触が契機となって顔見知りになり、それがある種の規制として働くのか非行問題等は皆無であるという。

環境美化、伝統の継承、青少年問題等地域課題のないところはない。その中で何を取りあげ、どこから解決していくかは会員の自主性にまかせられる。実践に移せるものは実行し、力が及ばないところは行政に要請するなどして解決のため

の足がかりをつくることによって、まちづくりの一步が踏み出される。しかも成人男子の行動は、家族・近隣等回りへの影響も大きく、人々の参加や意識の変革をも促す。そして地域ぐるみの社会参加活動が実現できれば、交流の促進といった副次的効果も期待できるのである。

ク、自己実現の機会提供機能

自己実現とは、「人間が、自己のもつ才能、能力、可能性を十分に生かし開発し、自己の到達しうる最高の状態を現実化すること」⁽⁶⁾である。換言すれば、自己実現とは社会の中で自分の「生きがい」、「やりがい」、「居がい」といった満足感を感じることである。それはその人の存在が社会の中で積極的に認められている時にのみ実現できる。自己実現は人々の生の最終的な目標でもある。これまで述べてきたア～キの機能を通して、人々は自分自身の力を発揮し、同時にまわりからの評価を得ることができる。それが自己実現につながるのである。

以上の機能を各単位壮年会の活動と照らし合わせると、およそ次の表4のようになろう。但し、「帰属感の保障機能」と「自己実現の機会提供機能」は、これらの活動を通して得ることのできる精神的な要素であるので、個別の活動に対応させることはできない。

(2) 壮年会活動の地域社会形成機能

今度は地域社会における壮年会の存在理由を考えてみたい。つまり、地域はなぜ壮年会を有するのかということである。それは、一言でいえば壮年会が担っている機能が地域にとって有益だからである。三浦によれば、社会教育の地域社会形成機能として次の三つが提案されている⁽⁷⁾。①地域生活問題の発見と認識、②地域生活問題解決の主体の育成、③地域生活問題解決の実践である。壮年会では、まず人的交流が先行し、その後問題の発見、行動へと移っていく。従って壮年会の地域社会形成機能は大きく次の四つにまとめることができる。

- 1) 親睦・交流の促進機能
- 2) 生活課題・地域課題の発見と認識機能
- 3) 生活課題・地域課題の解決探求機能
- 4) 生活課題・地域課題解決のための実践機能

第1の機能は、壮年会という集団を組織することによって起こる人的交流がもたらすものである。各地の事例にも明らかなように、この人的交流は集団結成の要因ともなる。同じ集団の一員であるという信頼感、しかも地域を背負う成人男子としての誇りと自信が親睦を深め、相互理解を進めるうえで積極的に作用するのである。

表 4. 壮年会の機能に対応する各壮年会の活動

(活動はいずれも昭和59, 60年度の活動を中心にしてまとめた)

壮年会の機能	対 応 す る 各 壮 年 会 の 活 動		
	都 城 市	森 山 町	粕 屋 町
1. 個人的活動の共有化機能	囲碁・将棋大会 卓球 さつき・盆栽展	民踊 ダンス	演芸大会 お寺参り
2. 親睦・交流促進機能	運動会 夏まつり 六月灯 十五夜 花見 ソフトボール大会 海水浴	海水浴 旅行 忘年会 花見 盆おどり 運動会	運動会 ソフトボール大会 遠足会 バレー・卓球大会 夏越祭相撲大会 夏越祭
3. 相互扶助機能	交通安全運動 夜警 街灯点検 献血 花いっぱい運動	奉仕作業 施設慰問 清掃 屋根修理	丸山道手入れ 納骨堂清掃
4. 学習機能	各種学習会 ・民法・農地法 ・青少年と親の在り方 ・身近な法律について ・郷土の歴史 ・壮年団の役割 ・ガン対策について	グループ講習会 交通講話 保健婦講話 稲作講習会 農業講座	視察会 税務研修会 講演会
5. 個別の問題解決機能	集団検診 カーブミラー清掃 ヤブ払い	坪刈り	体力測定
6. 地域問題の解決機能	敬老会 青少年健全育成対策 民俗芸能伝承	町長との懇談会 町長・婦人会との懇談会 慣習の是正	町政報告会 青少年育成巡回敬老会 ジュニアソフトボール大会

第2の機能は、親睦と交流の中での情報交換によって生まれる。情報交換の中味は地域、仕事、家庭、趣味に関することなど様々であるが、その中で各人が問題とするところや地域の解決課題が話題となり、いくつかの問題の中で自然に優先順位がつけられ、集団としての問題の認識へと導かれていく。

第3の機能は、認識された問題の解決策を探る機能である。第2の機能においては問題は認識されたままであり、解決へはつながらない。認識した人々の間で解決しようという自覚が芽生えた時に第3の機能が生まれる。ここでは、集団内での討議、学習会の開催という形をとり、明らかに会員全員に解決課題として問題が提示されるのである。

第4の機能において実践へ移行する。ここでは討議された解決策をもとに個人が地域社会で実際に活動する社会参加が実現する。この実践は自らの意志に基づいたものであり、しかも課題は多くの人の課題である。そこから得られる満足感及び社会的評価も高い。

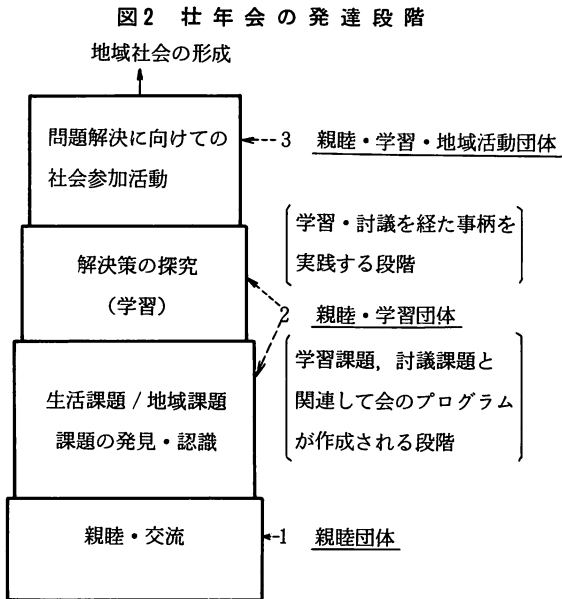
以上四つの壮年会にみられる地域社会形成機能は、その中で成人男子が学び、活動していく過程でもあり、壮年会の有する教育的機能であると考えられることもできる。ただし、必ずしもどの会もこれらの機能を有しているとは限らない。会の発達の度合いによって果たしうる機能も異なってくるのである。

(3) 壮年会の発達段階—〔親睦〕団体→〔親睦＋学習〕団体→〔親睦＋学習＋地域活動〕団体—

壮年会の地域社会形成機能は、同時に会の発達段階をも現わしている。つまり、先にみた壮年会の結成過程からも明らかなように、初めは交流を主目的にした親睦団体である。しかし、会が結束していくに従って、交流の中で生活課題・地域課題が話題となっていく。時には討議課題として取り入れられ、特定の問題を明らかにするための活動プログラムが登場する。各種の見学・視察を含む学習会、研修会等が催されるわけである。中にはこうした勉強会を定期的に開くところもでてくる。このような段階は、親睦・交流のみを目的とした段階から次の段階へ発展したとみることができる。親睦団体としての機能に加えて学習団体という機能が加わるのである。学習を始めた人々は、自分たちが当面する生活課題・地域課題に気づき、勉強会を始め、その具体的な解決策の研究を開始するのである。そして、学習の段階を経て問題解決に向けての社会参加活動へと発展していく。ここでは、学習・討議を経た事柄を全員の手で実践することになる。親睦・学習団体は、今や地域活動団体に成長するのである。

親睦団体として出発した壮年会は、順次学習、地域活動という柱を加えること

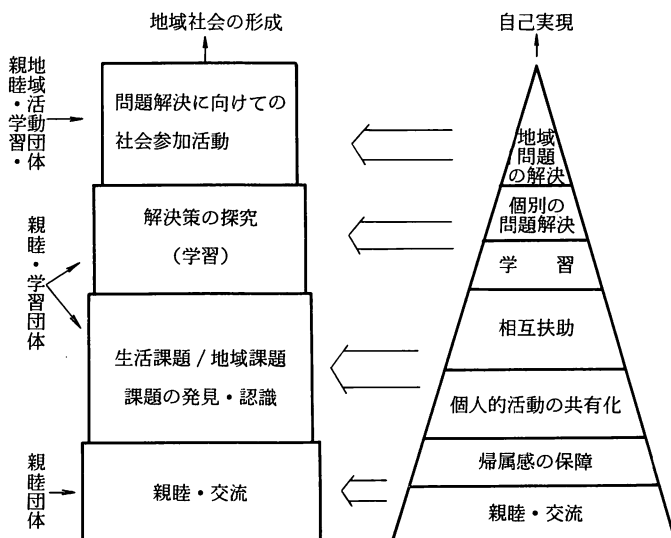
によって、地域社会で認められ、発言力、活動力のある団体へと成長していく。都城市の志和池地区の壮年会の会合では、PTAの方から青少年問題について相談に来る場面もあったが、それだけ地域社会に認められているという証拠であろう。壮年会が、親睦・学習・地域活動団体となる時、最終的には地域社会の形成が目指され、壮年会の力がいかに発揮される。以上の発達段階をまとめて図示すると次の図2のように表わすことができる（各壮年会の発達段階については表1～表3参照）。



さらに、先にみた壮年会の八つの機能も次の図3のように、集団の発達段階に照らして、基礎的な機能から地域活動を志向する機能へと段階的に並べることができる。

成員が親睦・交流及び帰属感の保障を求めて集団に属する時、集団は親睦集団として働く。次に、集団の中で個人的な活動の共有化や相互扶助活動が始まる時、特定課題を認識して集団で取り組む段階へ移行し、この時点で学習集団としての要素が加わる。さらに、課題の解決という明確な目標をもった学習が始まり、個別の問題から地域問題へと視点が拡大される時、集団は実践する地域活動集団として地域社会の形成に貢献し得るようになるのである。

図3 集団の発達段階と機能



(4) 機能の一般化

これまで、壮年会の機能分析により、集団として有する八つの機能及び四つの地域社会形成機能を取り出したわけである。しかしながら、それらの機能は、必ずしも“壮年会に特有の”機能ではない。即ち、個人的活動の共有化機能も帰属感の保障機能も親睦・交流促進機能も、それぞれの機能に注目すれば、種々の集団が有するものであり、“集団一般の有する”機能ということが可能である。そしてそれぞれの機能を果たすための集団が存在する。たとえば、個人的活動を共有するためには、各種サークルに所属すればよい。また、相互扶助機能は、各種保険の発達や相談機会の充実等によってかなり果たされてきている。学習機能に至っては、カルチャーセンターや専門学校等の隆盛を見れば一目瞭然である。

このようにそれぞれの機能は、壮年会という地域集団によって満たされる必要はなく、一つひとつの機能に分化することができ、それぞれの機能を満たす、つまり特定の機能のみを追求する機能集団が、機能の実施をとって代わることができるのである。

4. 壮年会と第2次集団

本稿では、壮年会など地縁、血縁をもとにして結成された集団を第1次集団と呼び、アソシエーション的な機能集団として結成された集団を第2次集団と呼ぶ。前節で見たように、壮年会の機能及び地域社会形成機能は、集団の有する機能として一般化することができ、機能に注目すれば、機能集団の方がより効果的に特定の機能を充足し得るといえる。ここでは、壮年会のような第1次集団と第2次集団とを比較し、その特徴を明らかにしたい。

(1) 集団成員の動機及び質の違い

第1次集団と第2次集団とを比較した場合、まず結成に至る成員の動機、集団に求める機能の点で大きな違いがある。つまり、第2次集団では、個人はある特定の機能を果たすために集団に属し、その分だけ目的がはっきりしており、また強固でもある。それに対し第1次集団は、地縁、血縁による心情的連帯感といったものを基盤としており、目的は各人一致しているわけではない。目的がはっきりしない分だけ動機が弱いといえる。また、集団成員の質を比較すると、第2次集団は目的が一致しているが故にその集団の果たすべき機能に照らして成員の質もある程度均等であるが、第1次集団はその点でも均等性に欠ける。

(2) 第1次集団と第2次集団の結合

人々が集団に求める機能は同一ではない。そして集団は、第1次集団であろうと第2次集団であろうと、集団が成長するに従って各種の機能をあわせもつことが期待される。例えば、壮年会が学習会を始めたり、各種クラブをつくったりする現象は、第1次集団から出発した集団が、学習機能、個人的活動の共有化機能という特定の機能を重視していくことであり、第2次集団的要素をつけ加えていく例とみることができる。また逆に、学習を本来の目的として集まったグループが成員の交流が深まり、仲間で旅行したり、各種ボランティア活動を始めたり、本来の目的以外の活動をも取り込んでいく現象は、第2次集団として集まった集団が、第1次集団的要素を含んでいく例である。このように考えると集団は、最終的には両者の要素をあわせもつことが望ましいと思われる。

(3) 集団の変容の方向—第2次集団から第1次集団へ—

しかしながら集団の変容を考えた場合、双方向の変容は同じように可能である

とは思われない。即ち、第1次集団に第2次集団的要素をもたせることと、第2次集団に第1次集団的要素をもたせることを比較した場合、前者の方がより困難であろう。それは、前述した第1次集団の成員の結成動機の不一致、質の不一致に起因する。しかも、現代のように高度の知識・技術が求められるようになると、ひとつの機能に関し様々のレベルが要求され、必然的に機能集団への所属が重要度を増してくる。明確な目的のもとに集まった集団は、いわば利害が一致しており、その分まとまりやすく行動力に富む。いったんまとまれば、そこに他の機能をあわせもたせることは容易であり、一種の準拠集団として成員の愛着、信頼も同時に深まっていくと考えられる。

換言すれば、メンバーに共通性が多い場合は、組織の強化・維持が容易であるが、メンバーに共通性が少ない場合は、それが難しい。壮年会は、地縁という共通性をよりどころにはしているが、地縁のみでは極めて薄いレベルの共通性ではないのではないだろうか。生活の変化、移動の激しさといった状況のもとで、地域の占める位置が徐々に個人の中で変化してきたからである。それに比べて、近年、成人男子の社会集団として地域活動に目を向けてきたライオンズ・クラブ、ロータリー・クラブあるいは青年会議所（女性会員も存在する）等は明確な目的のもとに集団を結成し、成員の質も共通性に富んでいる。しかも全く地域と離れているわけではなく、地域をも基盤としており、その中でも特に地域活動に目を向けているところは注目に値する活動を行っているのである。⁽⁸⁾

(4) 機能の選択

さらに二つの集団を比較すると、第1次集団においては個人の選択の幅が狭いということができる。特定の機能に限定されて結成されていないが故にあらゆる機能が最初から含まれることになる。そこには、ある個人にとっては全く不用のものも当然含まれる。しかし、成員として引き受けざるを得ないのである。そうするとどうしても“広く浅い”活動になりがちであり、個人が表にでることも少なく、必然的に“主人公”として能力を発揮する機会も少なくなる。一方、第2次集団においては、もともとその機能を選んで参加したわけであり、機能の“つまみぐい”が可能になる。故に成員の参加の度合いも高く、個人の能力が発揮される機会も多い。“主人公”となる機会が多いわけである。

いわば第1次集団は「総合デパート型」であり、第2次集団は「専門デパート型」であるということができる。人間の自由に対する欲求が強くなり、個人の要求が多様化してくると、いくつもの機能が並列に並べられた総合デパート型よりも、特定の機能に絞り、しかも質の高いものまで並べられた専門デパート型の集

団の方が要求にかなった集団となるのである。

以上第1次集団と第2次集団とをいくつかの観点から比較してきたわけであるが、地域社会形成の観点からみると、確かに第2次集団は集団としての質は高いかもしれないが、専門家集団がいくつあっても地域社会形成はいっこうに進まない。専門分野のみに集中し、まちづくりの視点が欠落していれば、地域社会との接点がみえてこないからである。

5. 集団の発達と学習活動の活性化

九州における三つの壮年会活動の事例からも明らかなように、集団が意識的、意図的に特定の課題の解決を活動の目的とする時、学習活動が不可避免的に登場する。それはもちろん、壮年会に限らず、また集団の性格・機能にかかわらず、すべての集団に起こり得る。即ち、特定の課題を集団の活動目的の中に含む段階で、その課題についての共通認識が成立しなければならないからである。また、特定の課題の解決に取り組む場合、計画の立案から実施・評価に至るまで、そのプロセスが意識化されるかされないかは別として、学習の過程を含まざるを得ないのである。

(1) 集団による地域課題の選択

このように考えれば、壮年会が地域が当面する課題の解決を活動目的のひとつに加えた時から学習活動が不可欠の条件となる。そして壮年会が活動目的の中に地域活動を含むか含まないかは、各壮年会の選択の問題であって、地縁を主とする壮年会が必然的に地域活動にかかわるという保証はない。従って、この点では、壮年会の選択が壮年会の学習活動の方向・内容を決定するといえる。それ故、壮年会以外の集団においても、それぞれの集団が活動目的の中に、地域課題の解決に取り組むという選択を含むか含まないかによって各集団の学習機能のあり方も地域形成機能のあり方も大きく変わらざるを得ないのである。もちろん、地域集団として出発する壮年会は、結成の当初から「地域」を集団活動の前提としているので、地域との心理的距離が極めて近いことはいうまでもない。この意味では、特定の機能を中心に結成される第2次集団は、「地域」を意図的に選択しない限り、地域社会の形成機能に集団がかかわることは起こらない。

以上のように、壮年会の研究から導き出される地域の学習及び社会参加の実践は、集団による地域課題の選択という基本条件を必要としている。従って地域における学習及び各種の社会的活動を活性化するためには、各集団が活動目的の中

202 自由投稿

に地域課題を選択するような指導・援助・動機づけ・奨励などの施策が必要となる。集団活動を経由して、地域の学習、ひいては地域社会の活性化を図ろうとすれば、それぞれの集団が活動の舞台として、あるいは対象として地域を選択することが不可欠なのである。

(2) 「コミュニティ活動基金」の創設

本稿でとりあげた三つの壮年会は、たまたま地域活動を活動目的として選択し、各種の課題に対する積極的な取り組みを展開してきた事例である。しかしながら、地域には多くの活動を続けながら、その活動が地域社会の課題と結合しないような活動を続けている多くの壮年会その他の団体が存在するはずである。こうした団体が地域の課題を選択するか否かは、これらの団体の興味・関心事項の中に地域が位置づいていくいかぬかにかかっている。従って、まちづくりや地域の学習という観点から、現在のように団体に対する補助金ではなく、たとえば「コミュニティ活動基金(仮称)」のような活動に対する補助金を創設することによって、必ずしも地域とつながっていない団体に地域活動への参加を奨励することが可能になると思われる。地域における学習の活性化は、活動計画として何が選択されるかにかかっているからである。

〔注〕

- (1) 人口13万人程の都市における壮年会は、会員数がすでに6,000人を超えている大規模なものである。組織としては、まず全市的組織である「壮年団体連絡協議会」があり、その下に地域ごとの壮年団体連絡協議会が設けられている。各地区には、日常の活動の母体となる単位壮年会が存在する(昭和60年4月現在で連絡協議会加入団体は114である)。会員の年齢は、おおむね25～26歳から64～65歳である。

連絡協議会が発足したのが昭和49年であり、単位壮年会は早いもので20年代に結成されている。最初は飲み会や世間話の会であったが、協議会の結成後、飛躍的にグループ数が増え、種々の活動が計画されるようになった。活動の大きな柱は「奉仕、親睦、学習」であり、目的は「会員相互の親睦と教養を高めるとともによりよい家庭や地域づくりを目指し、地域の振興の増進に寄与する」ことである。活動内容は、全市的活動として「ソフトボール大会」、「交通安全標語板設置運動」、「市長、教育長と語る会」、「壮年大学」などがある。日常活動は単位壮年会が中心であり、その中には、花いっぱい運動、夜警、夏まつり、六月灯(田植え後の祭)、おねっこ(正月行事)、青少年補導パトロール、献血、

スポーツ活動、廃品回収、各種の学習会などがある。会の運営経費は、会費と市の補助金とで賄われている。

- (2) 森山町は長崎県の南部に位置する人口6,000人程の農村地区である。組織的には、まず全町の組織である「森山町壮年グループ連絡協議会」があり、その下に各単位壮年グループがある。会員は現在300人程度である。会員の年齢はおおむね既婚～50歳となっている。

壮年グループ結成のきっかけは、昭和32年の諫早大水害であった。この水害によって同町では40数名の命が奪われた。当然地域の受けた被害は大きい。この混乱の中で、災害による痛手を克服するために壮年男子が力を合わせようという動きが起こり、会の結成に至ったのである。内容は、飲み会や世間話が主であった。その後各地に会が結成され、昭和51年に「森山町壮年グループ連絡協議会」が組織されたのである（昭和60年9月現在で加入団体は15）。

壮年会の目的は、「会員相互の理解と親睦を深め、相互扶助の精神にのっとり、会員家庭の発展と社会に貢献する」ことである。活動内容は、連絡協議会の活動として運動会、会員研修会、グループ例会訪問、役員研修会などがあり、単位グループの活動として旅行、施設慰問、町長との懇談会、海水浴、坪刈り（その年の稲の取れ高を一坪単位で調べる行事）、講演会、学習会、清掃作業などがある。運営費は会員の会費がほとんどを占めている。

- (3) 粕屋町大隈地区「積徳会」は、町の一地区にただ一つ存在し、しかも明治33年の創立以来、今日まで活動が続いている特異な会である。粕屋町は福岡市に近接する町で人口は29,000人足らず、大隈地区は同町の一地区である。昭和60年4月現在で会員は47人である。

積徳会は、村内が水利権その他をめぐって2派に分かれて争っていた頃、村内の融和をはかるために結成された。目的は「会員相互の親睦と自覚とに修養研究協力もって社会人としての知徳を高め率先個性を完成し醇厚美風明朗区文化の向上と産業振興の推進力となること」である。会員の年齢は24～39歳で、これも創立以来変わらない。主な活動内容は、夏越祭、相撲大会、清掃活動、遠足会、町民体育会参加、講演会、お寺参詣、登山道整備などである。明治時代から現在に至るまで、多少の変化はあるが大筋は継承されている。運営費はすべて会費で賄っている。

- (4) 福武直 「日本の地域社会とコミュニティの概念」 地域社会研究所編『コミュニティ』 地域社会研究所、昭和58年、p89
- (5) ただし、福岡県粕屋町の壮年会の場合は、共同体解体以前の組織が今日まで存続している例であり、再組織化という動きと同等に扱うことはできない。当

地区においても福岡市の近郊であることから、都市部への通勤の増加、兼業農家の拡大、新住民の転入といった変化は起きている。その中で存続していることの意味は大きい。しかしながら、その条件について述べることは本論の目的ではないので、ここでは特異性を指摘するのみにとどめておきたい。

- (6) 野島一彦，岡堂哲雄編『社会心理用語事典』 至文堂，昭和57年
- (7) 三浦清一郎 「社会教育の地域形成機能及びその診断のための指標化の試み」，日本社会教育学会年報第20集『コミュニティと社会教育』，東洋館出版，昭和51年
- (8) たとえば，青年会議所は，“明るい豊かな社会”の実現を目的とする20歳から40歳までの青年の団体であるが，各地で地域社会の開発と発展をめざして様々な事業に取り組んでいる。そのうちのいくつかを紹介すると，平塚青年会議所の「100万コミュニティの創造」運動では，市民市や七夕太鼓，実践経営スクールなどを企画し，川之江青年会議所では「川之江紙まつり」を，小田原青年会議所では「ふる里昔ばなし」の発掘と発行，点訳本の発行等を行っている。
(日本青年会議所「BIBLE OF JAYCEE」，1982)